

学位論文要旨および審査要旨

氏 名	梁 愛 舜
学 位 の 種 類	博士（社会学）
学位授与年月日	2001年3月31日
学位論文の題名	在日朝鮮人社会における祭祀儀礼—チェーサの社会学的分析—

【論文内容の要旨】

1. 本論文の研究課題

本論文は在日朝鮮人社会におけるチェーサと呼ばれる祭祀儀礼に着目し、このチェーサがどのように親世代、子世代さらに次の世代へと継承されるかを調査研究し、在日朝鮮人社会の民族的アイデンティティ、すなわち「どのようにその構成員の各々が民族的出自意識を踏まえた積極的生き方を追求しているか」について、その実態を解明することである。「聖と俗」（デュルケム）「潜在的機能」（マートン）さらに「集合的記憶」（M・アルバックス）等の社会学説に触れながら、チェーサが在日朝鮮人社会の「聖なるもの」の象徴的集団現象であることを明らかにし、さらに当該社会の「集団的統合」や「アイデンティティ」とチェーサとの関係について実証的・理論的な考察を試みている。

本論文は「二世」である著者による参与観察、「一世」からの聞き取り調査、「二世」や「三世」を対象にした質問票調査から得られた「一次資料」に基づいて記述されており、また韓国における儒教・儒教史関係の数多くの研究論文および朝鮮総督府時代の日本人研究者による調査資料が文献として参照されている点で有意義である。

なおチェーサとは在日朝鮮人の家庭において一般的に行なわれている祭祀儀礼を意味する。チェーサには「祖先の命日の忌祭祀」と「名節の茶礼」がある。名節は陰暦の元旦と秋夕（中秋の名月）の二回である。二世が祭主の現在では新暦の元旦と8月15日になっている。祭具、祭器、祭儒（供え物）さらに祭儒の陳設、儀礼の順序などに伝統的な厳格な決まりがある。

2. 本論文の構成

論文の構成は以下の通りである。

序論

1. 研究課題
2. 調査と方法
3. 本論文の構成(1)在日朝鮮人の「聖なるもの」(2)郷村社会の「聖なるもの」(3)「聖なるもの」の伝承

第1章 在日朝鮮人社会における祭祀儀礼—チェーサの社会学的分析—

- 第1節 チェーサ（祭祀）の役割と意味
1. 象徴現象としてのチェーサ
2. チェーサの潜在的機能
3. チェーサのもつ意味

- 第2節 在日朝鮮人社会のチェーサ
1. 発生と開花
2. 継承と変容・二世の時代

- 第3節 伝統的祭祀儀礼
1. 儒教的祭祀儀礼
2. 伝統的形式の確立
3. チェーサの形式

小括

第2章 在日朝鮮人社会一世のコスモロジーと郷村社会一世代交代と世俗化を中心にー

第1節 「儒教的家族」 1. 孝の場 2. 父との距離 3. 女性の地位 4. 超時空間的「孝」

第2節 親族集団と祖先 1. タンネ（堂内）親族と喪服制 2. 「ムンジュン（門中）」親族

第3節 儒教の周辺 1. 「下位宗教」の機能 2. 巫俗・仏教と交流する人びと

小括

第3章 郷村社会の親族と近隣結合

第1節 郷村社会と近隣結合 1. 地縁結合を結ぶ「契」 2. 郷村社会の労働交換

第2節 郷村社会の社会的葛藤 1. 同族（親族）と他姓 2. 「両班」と「常民」

3. 「郷友」と「契」

第3節 鎮守の祭祀ー「洞祭（部落祭）」 小括

第4章 チェーサと在日朝鮮人社会一世代交代と世俗化を中心にー

第1節 世代交代の問題 1. 「移民社会と世代交代」 2. 在日朝鮮人三世代のチェーサ

第2節 チェーサの世俗化の問題 1. 「世俗化」の様態 2. 世俗化の要因

第3節 変動する社会とチェーサ 1. 在日朝鮮人社会の変動 2. 新しい世代とチェーサの継承 小括
おわりに 1. 一世が残したもの 2. 課題と展望

資料 引用文献並びに参考文献一覧

3. 本論文の要旨

序論では、本論文全体の内容と構成、方法と調査、研究課題が紹介される。「本論文の全体の内容と構成」については、上記の1. および2. の項を参照。「方法と調査」に関して著者は本論文において対象者15名（主に一世）の「聞き取り」調査の結果を、また「質問票」の回収165（うち二世62, 三世103）をデータとして用いている。

第1章では、在日朝鮮人社会における祭祀儀礼、チェーサが社会学的に分析される。

冠婚葬祭は、周知のように、ある集団や社会の境界性を示す、もっとも可視的な社会学的指標のひとつである。在日朝鮮人社会では「チェーサ」がその成員の共同行為としてこれまで一貫して守られてきた。「なぜチェーサなのか」という問いに、「他のやり方（仏教の形式）を知らない」と答える「二世」を含め、日本への「定住意識」が当然視されている現在でも、チェーサは一世の時代から「当たり前」のこととして営まれている。チェーサは「祖先との結びつき」が、厳粛に聖なるリアリティとして会衆の面前に顕現する瞬間であり、マジョリティ文化の意味世界とはもっともなじみにくい瞬間である。チェーサの変容は、従って、日本社会との「融合の過程」を意味することにもなる。在日朝鮮人社会のチェーサの変容は、マジョリティ文化によって被る側面（「同化」）と、現代的な生活感覚（「世俗化」）がチェーサのあり方を揺さぶるという、複合した形であらわれる。チェーサが三世や四世にどのように継承されるかは、今日の「二世」の動向に大きく左右される。在日朝鮮人社会が逆境においても「統合」できたのはチェーサによるところが大きかった。チェーサは「祖先崇拜、祖先追孝」といった「顕在的機能」とともに、在日朝鮮人社会の親族集団を結束させ、新しい世代に「出自意識」を植え付けることによって、アイデンティティを生成するという「潜在機能」（マートン）を果たし、在日朝鮮人が「同化」と「排除」の論理に屈することなく、強く生きる力となった。

第2章では、チェーサとはなにかをめぐり、在日朝鮮人社会のチェーサの歴史的源流を「一世」のコスモロジー（象徴世界）を形作った、李氏朝鮮の「郷村社会」にまで遡及して解明される。郷村社会は「儒教」と等身大の「生活世界」である。農業的生産活動を基礎的構造とする郷村社会は、一定の労働力確保のために血縁・地縁の共同態的秩序をかたちづかった。「父子有親」「夫婦有別」「長幼有序」の儒教道徳が郷村社会における、階級分化や個人の自由な行動を阻止する「強い統制力」として作用し、また家族の分業を円滑にさせ、家族の結束を強固なものにした。チェーサは、自分たちの「祖先に孝をつくす」という聖なる心性の体现を意味し、郷村社会のなかで半永久的に幾世代にもわたって繰り返され続けた。「家族」は、この意味において郷村社会における「宗教的機能」をもつ最小の集団であり、その周りに「タンネ（堂内）親族」―親族の縦に5代横に8親等の氏族集団―や「ムンジュン（門中）親族」―5代祖以上の祖先を奉祀する親族集団―が縦に系列化される。祖先のための祭祀、チェーサは、家族・親族にとっての一大行事であり、それぞれの家族・親族はチェーサの日と生業の日、聖なる時間と俗なる時間の循環によって「活力と勇気」を得、郷村での生活を意味あるものにした。チェーサは、「一世」の故郷における家族・親族の「習慣の体系」であり、「一世」に「内面化」された「聖なる」行動様式であった。「一世」が日本社会においてチェーサを開始したのは、かくして、自然な営みであったことがわかる。「一世」は祖先の眠る土地から遠く離れても、チェーサを通して祖先と結ばれ、日本に生まれた子孫との絆を強める役割を果たしたのである。

第3章では、前章に続いて郷村社会の構造が分析される。郷村社会は、李王朝の儒教的政治支配の受け皿でもあった。「両班」と呼ばれる李王朝の官僚、儒学者が郷村社会における秩序の教化者であり、同時に「常民」、すなわち郷村社会の生産階級（農民）の直接的支配者であった。郷村社会は、かくして儒教的「孝」の実践による儒教的家族を単位とし、儒教的家族の奉祀する「門中」集団によって縦に系列化された血縁・親族ネットワークの世界である。同時にまた、郷村社会はこれら親族集団が「郷約・洞契」によって横に結ばれる近隣集団、地縁集団でもあった。郷約・洞契には様々な契（日本農村の「講」に比せられる）や労働交換のブマシ（個人と個人、家族と家族の間の「ゆい」慣行）やトゥレー（洞里全体の公共事業組織）などがある。郷村社会は「縦型の親族集団」と「横型の地縁集団」の交錯のうえに構築され、この縦関係と横関係を貫いて「守分之风」「上下之分」「長幼有序」「内外之別」の儒教原理が支配した。このように郷村社会は一見「整然とした秩序を形成」し、人々は「聖と俗」の循環構造のなかを生きた。論文は、しかし、常民や賤民の生産活動や生活空間の記述、女性の地位、儒教の周辺に存在する「下位宗教」（仏教、巫俗など）への着目、「はれ」の洞祭（部落祭）、郷村社会の深刻な社会的葛藤などについても丁寧な記述を試みている。1900年代前半期に生まれた「一世」のコスモロジーのルーツは、この郷村社会の生活にある。

第4章では、「世俗化」と「世代交代」の最中にある在日朝鮮人社会の「チェーサ」の実態の解明と分析が行なわれている。「世代交代」は、在日朝鮮人社会においてすでに五世代目を数える。「世代交代」は自然変動にすぎないが、当該社会には厄介な問題をうむ。「故郷感」ひとつにしろ、一世にとっての「故郷」は、三世にとっての異国・外国である。一世にとって日本は「いずれは帰る」「一時滞在」の地であり、三世にとっては「定住」の地である。二世はその中間を動く。アイデンティティも多様化する。チェーサにも「世代間格差」がみられる。「一世」の「聖なる」チェーサから「二世」のチェーサの「世俗化」へ―陰暦から陽暦へ、開始時間の繰り上げ、回数の減少、チェーサの「商品化」・「合理化」など―である。チェーサの「世俗化」を促進する要因として、著者は都市化や産業化や生活様式の変化、職業移動、

社会移動などの構造的な要因をあげる。

「一世」時代の「チェーサ」が在日朝鮮人社会の「集団的統合」に果たした積極的な役割については、本論文の第一章で詳説された。チェーサがあったから、在日朝鮮人は誇りを持つことができた。「デラシネ」にはならなかった。「同化」と「排斥」のなかで、自分自身を「見失う」こともなかった。ではその社会の中心が「二世」や「三世」に移っている現在はどうか。上述のように「滞在型」から「定住型」へと在日朝鮮人社会のあり方も変化している。チェーサも「一世」の時代のそれとは姿や形を変えている。チェーサに対する見方も変化し、また生活様式も変わった。こうした一連の変化を総体として、著者は「世俗化と世代交代のなかで、新しい世代は『定住』を自明とする朝鮮人としての新しい生き方を模索し、在日朝鮮人社会の再認識と再組織化をはかっている」という視点から捉えかえす。「チェーサの世俗化」の動きも、社会の構造変動にたいする集団の積極的な再編成過程であり（単なる受動的適応ではない）、「一世」の集合的記憶としてのチェーサは、「世俗化のなかでさまざまな様態をとりつつも、もっともベーシックな形式において踏襲されている」と。

終章では、「チェーサという宗教儀礼をととして在日朝鮮人社会のアプローチの試み」によって在日朝鮮人社会の研究に新しい視点を示したことが述べられ、また在日朝鮮人社会の三世や四世を対象にした補充調査、朝鮮半島におけるチェーサの調査、アメリカなどコリアン・コミュニティを対象にしたチェーサの比較研究など今後の課題と展望が示される。

【論文審査の結果の要旨】

審査委員会は2001年2月16日公聴会を開催し、提出された論文の審査と論文を中心に口頭試問を行なった。以下に論文の意義ならびに口頭試問の内容を記す。

(1) 審査委員会は本論文について厳密に検討した結果、以下の点を優れた成果であるとする。

第1に、研究主題に現代的な意義がある。グローバル化、ボーダーレス化の進展のなかで、比較文化や異文化共生といった研究領域はますます重要になってくると思われるが、本論文はまさにそのような研究として位置づけることができる。本論文の課題としている「移民社会」の構成員の世代交代によるホスト社会への同化か、それとも民族的アイデンティティを保持しつつの共生かは、これからの社会研究にとってきわめて重要な論点である。

第2に、綿密な事例研究として優れている。一世、二世、三世などの世代ごとの綿密な事例研究によってチェーサの「世俗化」の実態が正確に明らかにされ、またその要因も説得的に分析されている。さらに、それらの意味付けとして「ホスト社会へのたんなる『同化』ではなく、社会の構造変動にともなう、集団の積極的な再編成過程といえる」という主張にも無理がない。同時にこの主張には「構造の変動に規定されながら、同時に行動のオルタナティヴスを自らの意思によって選択的に決定する」という「構造選択性」（マートン）の視点と「柔軟にして粘り強い」チェーサ実践にたいする著者の願いが透けて見える。

第3に、本研究はきわめてユニークな研究である。これまでの在日朝鮮人社会に関する研究は、ホスト社会との法的地位をめぐる問題、差別問題、民族教育問題、運動論などが中心であった。反面、社会構造や社会集団の機能や役割など、社会生活の細部に着眼した「社会学的研究」は少なかった、という著者の発言は重要である。言い方をかえれば、表側の「公共的」領域の研究は沢山みられるが、裏側の「生活世界」領域の研究は意外と「乏しい」ということである。「生活世界の領域」は家族・親族など「私的生活領域」に深くかかわっており、当事者からすれば「あまりに自明すぎて問題にならない」。反対に外部者

からすれば、この領域は「見えにくい」し、あまりにもプライバシーの問題に関わりすぎて、「触れにくい」。チェーサ研究なども、著者が述べる通り、これまで手つかずのままに放擲されてきたのだろう。この研究の先駆性を承認したい。それ以上に、深層の「私的領域」と表層の「公共領域」が支え合い、表が裏と一体になり、チェーサという祭祀儀礼が結果として在日朝鮮人社会の「統合」に寄与したという「予期せざる結果」の指摘は興味深いし、仮説の立て方も一級である。

第4に、一次資料収集の困難さを克服し、貴重なデータをもとに実態分析を実施した点が評価できる。「チェーサについて意見を交わすこと自体が従来はタブーであり、果たして調査が実現するかどうか、協力者が得られるかどうか、不安であった」と著者は述べている。チェーサは「神聖な営み」であり、朝鮮半島の道徳通念からみて、高齢の一世に「あれこれと質問すること」は「歓迎されないこと」であるが、「一世が減少しているからこそ、いま聞き取りをすることは重要だと考えて、勇気を出して、無理を承知でお付き合いいただいた」（5頁）。プライバシーに関わるだけに、「身近な知人から開始し、その知人からまた人を紹介してもらう方法」を採用し、質問票調査の配布と回収は、「無作為抽出の方法に及ばず」であったが、「近畿圏を越えた広域から質問票（165票）を回収できた」。このことは、データの偏りを指摘するよりも、むしろデータの客観性の確保に対する著者の熱意と努力として評価すべきである。

第5に、優れた実証的分析であるばかりでなく、また優れた理論的研究でもある。聖と俗、潜在的機能、集合的記憶、生活世界などのキーワードを有効にもちいて、興味ぶかい一次資料を一定の理論的スキーム（デュルケムやマートンの機能分析に類似している）をもちいて論理的に整理し、考察を首尾一貫させたこと。

第6に、いままで先行研究のない未開拓の分野に挑戦し、興味深い論点を摘出したこと。

(2) 論文に含まれているいくつかの問題点

公聴会において問題となった論点のみ以下に記す。

1. チェーサということばをあえて用いた理由、またチェーサは「宗教儀礼」であるか。
その場合宗教とはどのような意味か。
2. なぜチェーサを取り上げたのか、またデュルケムの「聖と俗」、マートンの「潜在的機能」、アルパックスの「集合的記憶」をこの論文において用いた理由はなにか。
3. 「一世」の「聖なる」チェーサ問題については、ウェーバー的な「行為者の主体的側面」を力説し、他方「二世」や「三世」のチェーサの「世俗化」についてはマルクスの「構造」的な見方をしていないだろうか。
4. 「生活世界」ということばが「在日朝鮮人社会」にも、「郷村社会」にも使用されているが、このことばを用いる意義はなにか。
5. チェーサの集団的統合は「家族・親族」に関して論究されたものであり、より複合的多元的な「在日朝鮮人社会」の統合とはやや「ずれ」があるように思われるが、どうか。同様に「郷村社会」の場合はどうか。郷村社会と在日朝鮮人社会との間の構造上の差異について。
6. その他に「チェーサ研究から導き出された民族アイデンティティ論は他の「移民社会」の場合に「普遍性」をもつだろうかをはじめ、「方法」の問題や「言語と祭祀儀礼との関係」の問題の質疑応答がおこなわれた。

これらの論点は「今後の課題としたい」との回答のあった論点（4. および5.）を含め、概ね妥当な解

答を得た。それらの回答内容は、評価⁽¹⁾の6項目のなかに含めて記されている。

以上本論文に関する評価点と検討を要する点を指摘したが、審査委員会としては、既述のように、未踏の研究領域に斬新な視点から、綿密な調査に基づく1次資料の収集と関連歴史文書の渉獵に基づき、大胆に研究対象に切り込み、興味深い研究を成し遂げた点を高く評価するものであり、研究は成功を収めていると考える。以上のことから審査委員会は一致して学位（社会学博士）請求論文として妥当な水準に達しているものと判断する。

従って、審査委員会は、本学学位規定第18条第1項に基づき、梁愛舜氏に学位を授与することが適当であると判断するものである。

【試験または学力確認の結果の要旨】

審査委員会は学位請求論文を精読し、公聴会において1時間半余におよぶ質疑応答をおこなった。それらを通じて、上記のように、著者の専門的知識が深く、朝鮮語などの語学力を含む豊かな学識を有することを確認した。また、著者（学位請求者）が本研究科在籍中に、学則に基づき所定の単位を取得したことを確認した。以上により審査委員会は、本学学位規定第25条第2項に基づき、試験等の学力確認を免除するものと判断する。

審査委員	（主査）佐藤 嘉一	立命館大学産業社会学部	教授
	（副査）中川 勝雄	立命館大学産業社会学部	教授
	（副査）黄 盛彬	立命館大学産業社会学部	助教授